

源氏物語生々流転  
論考と資料  
目次



	四 『源氏物語』の方法へ……………	31
	③ 『源氏物語』の文体形成——仮名消息と仮名文の表記——……………	37
	一 歌と地の文の融通……………	37
	二 作意の表記、作為の文体……………	41
	三 地の文と会話文、地の文と心内文の融通……………	43
	四 融通する文体の因由……………	46
	五 融通する文体の偏在性……………	49
	六 仮名文の表記様式の逆規制……………	52
	七 仮名消息と仮名文の表記様式……………	54
	④ 『源氏物語』の引用表現における異文——引用本文の行方、引用表現の含意——……………	61
	一 異文の痕跡……………	61
	二 『源氏物語』の本文と『伊勢物語』の異文……………	64
	三 錯覚による引用本文……………	66
	四 若紫・光源氏と『伊勢物語』四十九段……………	69
	⑤ 『源氏物語』と仮名……………	73
	一 仮名と〈女の一生〉……………	73
	二 『源氏物語』の仮名書芸論……………	78
	三 百花繚乱——『源氏』の女君の筆跡を古筆になぞらえる……………	89
	四 付けたり……………	91
	Ⅱ 思想と美学……………	95
	⑥ 『源氏物語』の文学思想——わが名を冠した物語の作者としての——……………	97
	一 狂言綺語の文学観と物語……………	97
	二 『蜻蛉日記』の文学精神……………	99
	三 源順・曾丹・そらごと……………	102
	四 『蜻蛉日記』から『源氏物語』へ……………	106
	五 螢巻の物語論と『蜻蛉日記』……………	108
	六 物語と和歌と三史五経と伝典と……………	112
	七 『源氏物語』の文学観・物語観……………	114
	八 付けたり 雨夜の品定めと『蜻蛉日記』……………	120
	⑦ 物語の周縁——猥雑なるものとその行方——……………	131
	一 猥雑なる本性……………	131

二 『源氏物語』と猥雑なるもの	133
三 猥雑なるものと絵	135
四 「男女ならび居たる絵」	137
五 偃息図	140
六 猥雑なるものの意義	142
<b>8 『源氏物語』の仏教</b>	143
一 天台浄土教の宿世観	143
二 無意識的方法としての宿世観	145
三 宿世の罪と愛執の罪	147
四 宗教と文学	149
<b>9 『源氏物語』の美の遡源——情念の哀しさと美的慰藉——</b>	153
一 美とは	153
二 美貌と愛執	154
三 情念の哀しみと美的慰藉	156
四 美的慰藉の淵源	159
<b>10 光源氏の愛と性</b>	163
一 背徳的な性愛と王権物語	163
二 欲望装置としての光源氏	166
三 美的客体化と性的身体	168
四 源氏の求めた愛	173
<b>III 人物造型論 男君</b>	175
<b>11 光源氏の造型——表現類型の中の光源氏——</b>	177
一 光源氏論のむずかしさ	177
二 光源氏とその物語の原理——王権論	181
三 物語行為における〈美貌〉と〈色好み〉の意味 ——見る主体への転化、あるいは欲望の装置	187
四 光源氏造型の変質と〈女の物語〉の主題性	195
五 表現類型の中の光源氏	202
<b>12 「人やりならず」攷——柏木論のための序章として——</b>	225
一 柏木論の問題点	225
二 「人やりならず」の文学伝統	231

三 『源氏物語』の「人やりならず」	235
四 源氏、柏木、薫の「人やりならず」	243
13 薫の人間造型	253
一 主題性の葛藤	253
二 橋姫巻の薫	261
三 薫の人間像	269
四 薫の造型方法	275
IV 人物造型論 女君	285
14 明石君の深層——想像力と夢——	287
一 二つの視座	287
二 構造上の役割と神話的想像力	287
三 明石君と紫上	289
四 造型の方法と来歴	291
15 玉鬘の魅力——奇談性と日常性——	295
一 玉鬘の役割	295
二 好みな欲望の対象——大夫監の場合	296
三 好みな欲望の対象——源氏の場合（一）	297
四 好みな欲望の対象——源氏の場合（二）	298
五 好みな存在から良妻賢母へ	300
16 『源氏物語』の人間造型と『伊勢物語』	305
一 「うし」と「宿世」	305
二 「うし」と「つらし」	306
三 『蜻蛉日記』の「うし」と「つらし」	308
四 二条の后と藤壺	309
五 二条の后と和歌	312
V 流転——新資料による論考——	315
17 『源氏物語』には五十四帖以外の巻があった	317
——散佚した巢守巻の古写本断簡——	317
一 改竄される物語の写本	317

二	五十四帖以外の巻の存在	318
三	古本「巢守」の復元	319
四	二葉の物語の断簡	320
五	古本「巢守」の古写本断簡	323
六	一葉目の断簡と『浜松中納言物語』散佚首巻	327
七	放射性炭素 <sup>14</sup> による年代測定	328
八	散佚物語・古筆切・物語の流動	328
九	付けたり	330

18 『源氏人々の心くらべ』『源氏物あらそひ』の祖型の断簡  
——『源氏物語』評論の初期資料発掘——

一	さまざまな『源氏』享受	333
二	不詳『源氏物語』評論の新出断簡	334
三	断簡の内容——浮舟と空蟬	339
四	断簡の内容——薫と夕霧	341
五	断簡は『源氏人々の心くらべ』『源氏物あらそひ』の祖型か	343
六	炭素 <sup>14</sup> 年代測定	345

19 『源氏物語』の秘説と後小松上皇

——新出三条西実条筆本『兼宣公記』断章から——

一	『源氏物語』秘説と文化的支配	349
二	新出三条西実条筆本『兼宣公記』断章と旧説訂正	351
三	「源氏三ヶ秘抄」および紙背の翻刻	353
四	新出資料の詳細	371
五	秘説伝授の政治的意味	373
六	付けたり	375

VI 『源氏物語』の周辺

20 紫式部の恋

一	『日記』『家集』にどう向かい合うか	389
二	『紫式部日記』の表現構造と秘められた主題——道長との恋	391

21 『更級日記』主題論——偽装の懺悔・功德の放棄——

一	物語へ、物語とともに	403
二	物語の意味——偽装の懺悔	405

三	さてもありはず	410
四	功德も作らずなどしてただよふ	414

22	谷崎潤一郎と『源氏物語』	419
----	--------------	-----

一	想像力の源泉	419
二	内容面での『源氏物語』摂取	420
三	情念の類型としての『源氏物語』	422
四	文体と表記	425
五	語りの方法	427

VII	『源氏物語』関係古筆切資料	431
-----	---------------	-----

23	本文関係の古筆切資料	433
----	------------	-----

一	古筆切の価値	433
二	別本	435
①	伝西行筆(御法卷)	435
②	伝藤原家隆筆(明石卷)	436
③	伝阿仏尼筆(手習卷)表裏	437

④	伝阿仏尼筆(帚木卷)	439
⑤	伝藤原行能筆(総角卷)	442
⑥	伝二条為定筆(蜻蛉卷)	447
⑦	伝二条為明筆(若菜下卷)	450
⑧	伝二条為明筆(桐壺卷)	451
⑨	伝西行筆塙正切(宿木卷)	452
三	河内本	455
①	伝西行筆(浮舟卷)	456
②	伝藤原為家筆大四半切(薄雲卷)	457
③	伝藤原為家筆大四半切(真木柱卷)	459
④	伝称筆者不明(絵合卷)	460
⑤	伝冷泉為相筆(松風卷)	461
⑥	伝後伏見院筆大四半切(帚木卷)	462
⑦	伝後花園院筆(明石卷)源氏物語抄出切	464

四	青表紙本	466
---	------	-----

①	伝西行筆(浮舟卷)	466
②	伝慈円筆(薄雲卷)二葉	468
③	伝藤原為家筆(若菜下卷二葉・玉鬘卷)	471
④	伝藤原為家筆(若菜上卷)	474

⑤ 伝慶融筆(帚木卷)……………	475
⑥ 伝称筆者不明(御幸卷)……………	475
⑦ 伝冷泉為相筆(夕顔卷)……………	477
⑧ 伝冷泉為相筆(明石卷)……………	477
⑨ 今川了俊筆伊予切(夕顔卷)……………	478
⑩ 伝一休筆須磨切(須磨卷)……………	480
五 繪卷詞書……………	481
① 伝称筆者不明 源氏物語繪卷詞書(須磨卷)……………	481
六 後人書き加えの卷……………	486
① 伝花園院勾当内侍筆(伝後光厳院筆) 山路の露(源氏物語続篇)断簡二葉……………	486
24 注釈書・梗概書・和歌集・その他の古筆切資料……………	491
一 注釈の始原……………	491
二 注釈書……………	493
① 伝二条為明筆 源氏釈切……………	493
② 伝浄弁筆 源氏釈切 表裏……………	497
③ 伝四辻善成筆 河海抄 細川切……………	500
④ 伝寂連筆 不明注釈切……………	502
三 梗概本……………	504
① 伝二条為重筆 梗概本切……………	504
② 伝後花園院勾当内侍筆 梗概本切……………	506
四 源氏物語和歌集……………	507
① 伝京極良経(為家)筆 葦手下絵源氏物語和歌集切……………	508
② 伝藤原為家筆 源氏物語和歌集切……………	509
③ 伝松尾芭蕉筆 源氏物語和歌集切……………	512
初出一覧……………	517



- 一、源氏物語の引用本文は日本古典文学全集本（小学館）により、巻名・頁数を示した。
- 一、和歌の引用はおおむね新編国歌大観によったが、それ以外の場合は随時記し、漢字ひらがな表記は私に改めた。
- 一、源氏物語・和歌以外の作品や注釈書の引用は、随時記した。
- 一、巻末に初出論文名と掲載書・掲載誌の一覧を掲げた。

## 序

『源氏物語』は世界文学史の中でも、とりわけ早くに成立した傑作、深遠な主題を開拓した秀逸な文学、かつ第一級の娯楽作品でもある。このような『源氏物語』を成り立たせ得たものは何なのか。

仮名で物語を書くことには、どのような問題がはらまれていたのか。革新的で多様な方法、深い認識と思想、個性的な人間造型など、『源氏物語』の独自の世界形成はどのようにして獲得されたのか。『源氏物語』作者紫式部が、自らに先立つ文学的伝統——仮名表記史あるいは文学史の状況——とどう向かい合い格闘したのかを、様々な側面から考えてみた。様々な側面からのアプローチであるが、そこに通底するものは、『源氏物語』の本質の把握、全体像の把握であったと思う。

また、写本しながら読むという平安・鎌倉時代の文学享受の実態に分け入ることで、古典文学の本文とは何かという本質的な問題、あるいは『源氏物語』が変容し流転する様、さらには『源氏物語』の批評・注釈の生成について考えてみた。

末尾には、『源氏物語』関係の新出古筆切資料を紹介した。国文学の本文研究に資するためであるが、書物の断片の単なる紹介や煩瑣な本文異同の詮索に終始するのは、自閉的で狭隘な印象をぬぐえない。しかし、文献資料というものは、それぞれがさまざまな問題を内在させている原石のようなものだ。それらを一葉一葉積み上げて、多角的に考究することによって、豊かな可能性が拓かれる。書物の断片の外的内的な考究が、本文研究のみならず、書誌学や文学史や表記史、さらには書道史や美術史の新見解を導くことも少なくない。より広い世界に展開することを期待して、いささかの資料紹介をおこなった。

本書は、『源氏物語』が、仮名で書かれた物語としてどのように自己形成し、ことばの世界としてどのような思想——世界観・人間観・文学観・美意識など——を生成し表現したのか、そして、その本文がどのように流転し変容し、様々な享受形態——注釈・評論・秘伝など——を生み出し、文学・文化・政治の世界に根を張っていったのかということの探求、『源氏物語』の生成と世界と流伝の探求の痕跡である。

最後に、原稿入力、写真撮影、校正にご協力いただいた諸氏、加倉井東氏、浅井敦氏、菅野公子氏、菅留衣氏、木村薫氏、小原みと希氏に記して深く感謝申し上げます。

二〇二〇年三月三十一日

池田和臣

## ① 『源氏物語』の原本とは何か——当たり前からの出発——

### 一 古典文学作品の原本

ことは『源氏物語』に限らない。文学作品の原本とは何かと問われれば、作者の手になる書写本（作者自筆本）、あるいはそれに準ずる写本——たとえば、能書などが作者自筆本を清書した写本、作者の監督下に書写された写本など——と答えるしかあるまい。言わずもがなの答えである。

しかしながら、古典文学作品、とりわけ中古中世の物語文学作品にとっては、「作者の手になる」というところで、そもそも躓いてしまう。婦女童蒙の弄び物と見なされていた物語文学作品の作者であることは、必ずしも社会から尊敬の念をもって迎えられることではなかった。それゆえ、和歌の作者とは違って、物語文学作品の作者はほとんど記録に残っていない。物語作者として評判が立ったり、物語作者であることが伝承され始めたのは、『源氏物語』から後のことであつたと思う。それはとにかくとして、作者すら分らないのだから、作者の手になる書写本など探しようがない。

さらに、物語作品の本文は、作者が気の毒になるほど勝手気ままに書き変えられた。『枕草子』（能因本二六二段）に、

物語こそあしう書きなしつれば、言ふかひなく、作り人さへいとほしけれ。「なほす」「定本ちやうほんのまま」など書きつけたる、いとくちをし。

（小学館完訳日本の古典本 一六三頁）

とある。「通常、物語を悪い言葉で創作するとどうしようもなく、作品だけでなく、作者までが気の毒になると解釈されるが、『書きなす』とあり、ひどい言葉で書写した場合のことをいうか。当時、一字一句、物語の原文に忠実に書写しなければならないという意識は乏しく、比較的自由に書き換えられた」(鈴木日出男『日本の文学 古典編 枕草子 下』脚注)のである。物語作品の本文は、勝手気ままに改竄されたのである。それも、表現の細部にとどまらない。時には筋立さへ替えられたり、増補されたりもした。『伊勢物語』の成長、『住吉物語』の改作、『夜の寝覚』の縮約、『とりかへばや』から『今とりかへばや』への改作など、数少ない現存作品の中にもその改変・増補・縮約の実例が残存している。

作者も分からず、写本がとられるにつれて勝手気ままに改変されるのが、物語文学作品の宿命であった。原理的には、確かに作者の手になった原本は存在したはずである。しかし、物語文学作品の実情を考えれば、作者の手になる原本などとはとつくの昔に消滅してしまっているものであり、その復元を考えることは儚くむなし夢といふべきなのである。

にもかかわらず、あえて「源氏物語の原本とは何か」という問いが発せられるのには、それなりの理由があろう。それは『源氏物語』の成り立ちが、他の物語作品にくらべて比較にならぬほど明らかだからである。作者と成立年代がかなり分かっているからである。

一般に信じられている『源氏物語』の成立、すなわち紫式部によって寛弘五年(一〇〇八)の十一月頃までに書かれた五十四帖の物語ということとは、どのような根拠によっているのであろうか。その根拠をたどり直すことによって、『源氏物語』の原本とは何か」という問いに、いささかなりともにじり寄ることができるよう思う。

## 二 『源氏物語』は紫式部が書いた

『紫式部日記』の中の『源氏物語』の成立にかかわる記述をたどってみよう。まず、寛弘五年(一〇〇八)十一月一日、彰子腹の皇子の五十日の祝宴のくだり。

左衛門の督、「あなかしこ。このわたりに、わかむらさきやさぶらふ」とうかがひたまふ。源氏にかかるべき人も見えたまはぬに、かの上はまいていかでものしたまはむと、聞きゐたり。

(新潮古典文学集成本 五二頁、以下同じ)

「左衛門の督」は藤原公任である。同じ官職にあつた藤原頼通とする説もあるが、寛弘五年秋のくだりで頼通を「殿の三位の君」と呼んでいる。頼通であるなら、「左衛門の督」と呼び捨てにする可能性は低い。「わかむらさき」は「かの上」という表現で受けられているので紫上の若い頃、すなわち若紫の君である。公任は紫式部に「この辺りに若紫さんは控えているか」と呼びかけたのである。ということは、公任は若紫という登場人物を、若紫巻を読むか人から聞いたかして知っていたことになる。また、紫式部に呼びかけたということは、紫式部が源氏物語の作者だと知っていたことにもなる。さらに、紫式部が「かの上」と受けたことから、紫上がはじめて「上」と呼ばれる薄雲巻が、すでにこの時点までに存在していることになる。

この記事と関わる記事が、あと二カ所ある。一つは消息文の体裁で記された部分の、左衛門の内侍の紫式部に対する陰口の話である。

うちの上の、源氏の物語、人に読ませたまひつつ聞こしめしけるに、「この人は、日本紀をこそ読みたるべけれ。まことに才あるべし」と、のたまはせけるを、ふと推しはかりに、「いみじうなむ才がる」と、殿上人などにいひちらして、日本紀の御局とぞつけたたりける。

(九六頁)